S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション
前期：キリスト教と近代的知
後期：方法論的考察と聖書の社会論

オリエンテーション
Ⅰ：象徴・言語・システム
　１．象徴・言語１
　２．象徴・言語２
　３．象徴・言語３
　４．システム・宗教 10/26
Ⅱ：レトリック・メタファー
　１．レトリック・メタファー 11/2
　２．メタファー・モデル 11/9
　３．イエスの譬え 11/16
Ⅲ：コミュニケーション・解釈
　１．伝統と意味の地平 11/30
　２．多元性と対話 12/7
　３．イデオロギーとユートピア 12/14
Ⅳ：宗教と文化――構造と動態 1/18

Ⅰ：象徴・言語・システム

１．象徴・言語１

（１）カントとドイツ古典哲学の課題（前期）
（２）哲学的象徴論――自然／文化／宗教
（３）言語哲学と象徴論

２．象徴・言語２

・リクールの言語論の展開：象徴論→隠喩論→テキスト解釈学（1960年代～1970年代）
Paul Ricoeur, *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, The Texas Christian University Press, 1976.

３．象徴・言語３

（１）非実在論としての近代宗教批判
１．宗教的現実を構成する象徴体系の理解困難化・解体という歴史的動向を背景にして。カントから始まる認識論の近代的な動向。素朴実在論、教条主義の解体。
２．カントとフォイエルバッハ以降の知的状況で、宗教哲学はいかなる仕方で可能なのか。言語・解釈という迂回路を辿って（リクール）、科学と宗教との関係性の問いから、自然哲学あるいは形而上学を再考すること。
（２）カントの批判哲学を経た実在論（実在論の再興）
３．批判的実在論：批判＋実在論
４．科学言語と宗教言語の共通の問題（「宗教と科学」関係論の主要テーマの一つ）
（３）言語の指示機能と実在論・真理論
５．実在論を言語の指示機能の問いとして定式化する。言語論の詳細な議論の成果を利用した理論構築を可能にする。
６．実在論をめぐる多様なアプローチ

内部実在論（パトナム）、活動実在論（出口、5）

（4）指示と実在をめぐって

7．指示の記述説と因果説（芦名、160-167）

・指示の記述説（フレーゲあるいはラッセル）

アリストテレス＝「プラトンの弟子であり、アレキサンダーの先生である」

・指示の因果説（クリプキ）

固有名、一種の命名式（「私はこれをＡと名づける」）、言語共同体と指示の因果的連鎖

8．ソスキースは、この因果説を、「神は霊である」といった宗教言語に適応する。

伝統と聖書→言語共同体と指示の因果的連鎖。

権威と霊感

４．システムと宗教

・言語：ラング（構造・意味、普遍性・可能性、公的）と

パロール（出来事・指示、個別性・現実性、私的）の弁証法

↓

・文化全般の分析へ拡張

構造・意味は、体系（システム）内部の関係性として理解できる。

これを、宗教論に応用する試み。

↓

・宗教を、精神の次元における生＝システムという枠組みにおいて議論する

・システムと機能という議論（システム哲学・社会システム論）を手がかりに

・文化における宗教の機能（Ⅳへ）

・次元の創発性、自己組織化（今年度は扱わない）

（1）社会システム論から宗教へ

1．自己と他者の関係づけのモデル、システム論の背景

近代的モデル／コミュニケーションモデル

見る	語る
自己省察	関係性（自己／他者）
意識の明証性	解釈学的循環・歴史性
デカルト、カント	シュライアマハー、キルケゴール
現象学	ハーバーマス、アーペル

2．一般システム論（→集合論・グラフ理論・ネット理論、サイバネティクス、情報理論、オートマン理論、ゲーム理論から、生命、社会、生態系、宇宙へ）

科学における「分析的手法」（対象は部分に分解される、部分の振る舞いの記述は線形的である）の限界の認識から生じた。

システム（相互作用する要素の集合）は諸部分の総和以上である。　→　全体論

システムの諸部分は互いに相互作用しており、それは非線形的な記述を要求する。

3．「システム／環境」：システムの自己完結性（構成要素の自己組織化）と環境開放性

4．現代社会学の展開：パーソンズからルーマンへ

社会システム：一定の環境内で、相互に指示し合う社会的行為の意味連関の総体

構造－機能主義（パーソンズ）から、機能－構造主義（ルーマン）へ。システム・構造・機能。

S. Ashina

５．前期ルーマンの社会システム論

システムと環境（システムの内と外の差異化）、それらを包括する世界

システムを機能から分析する。はたらくを機能は他の機能によって置き換え可能である

システムの複雑性(Komplexität)：システムは現に現実化している状態以外の無数の可能性を有する。多数の要素の選択可能性

cf. 言語・ラング：差違の体系　差異性、否定、選択としての意味

複雑性の縮退(Reduktion von Komplexität)：社会システムの中心的機能

可能性の選択作用としての意味機能。選択＝排除・否定

複雑度の落差＝システムの内と外の境界設定

世界の中で、複雑度の低い領域を形成し、行為の方向付け・予測を可能にする

世界を複雑性の縮減によって処理しようとする

複雑性の縮減（一定の構造を有する言語）による複雑性の増大（構造的制約があるからこそ自由に多くの事柄を表現しうる）。システム構造の選択は、環境の複雑性によりよく対処できるかどうかによってチェックされる。

６．宗教論（『宗教の機能』1977 年）

・宗教が社会を統合する機能を有することはデータに矛盾する

・意味（過剰な可能性から特定の可能性を選択すること）から宗教へ

意味システムは自己参照的に閉じたシステムである（循環性）。複雑度の落差によって、境界の外＝周囲には規定不可能な環境が存在し、システムにとって環境は自己参照を中断させる非－我・我々として現れる。

・宗教：聖なるものという暗号によって、究極的に規定不可能なものを規定可能なものへと変換する機能。人間の経験と社会行為の有意味性の保証

cf. 神の存在論証の意味、神という暗号

無限遡及とその停止、差違の体系に根拠を与える。

外部を指示する暗号、つまり主権

（２）ルーマンの社会システム論

１．前期ルーマンは、意味概念に関してフッサールに依拠することによって、フッサールと同様にモロノーグ的な意味理解に陥っている。

Jürgen Habermas / Niklas Lehman, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie,* Frankfurr a.M. 1981, S.171-202

２．意味とは、可能性の選択（否定を介した）であるとされたが、その選択の正しさは、単独の主体だけでは、保証されない（単独の主体の行う選択はすべて正しい選択となってしまう。独裁者）。選択は、他者によるチェックに開かれていなければならない。意味とは他者の視点によって見られることを前提とする。意味は、自我と他者とのコミュニケーション過程にその成立の場を有している。

３．オートポイエーシス

マトゥーラとヴァレラによって､生命体に妥当する組織原理として導入（生命システム）。

システムは自らの働きによって自身の組織を継続的に産出する。細胞は閉鎖的システム（一つの作用する統一体）であり、それによって環境との接触（エネルギーや物質の交換、開放性）を行いうる。細胞は環境との交換を自ら制御する。閉鎖性と開放性とは相互補完的な関係にある。オートポイエーシス的システムは自律的(Autonomie)ではあるが、自足的(Autarkie)ではない。

４．神経システム：ニューロンの自己関係的なネットワークである。ニューロンの活動は

先行するニューロンの活動に対する反作用。脳は閉鎖的な自己参照的システムであり、感覚器官によって外界と接触するのではない。感覚器官は外界の出来事をニューロンの活動に転換する（内と外には一義的な相関関係はない）。

知覚は外部世界をそのままに映し出したものではなく、システムの外部にある世界をシステム内部で構成したもの。

５．一般化：心的システム（要素：思考内容、表象）、社会システム（コミュニケーション）

・意識・心は、思考内容から思考内容へ、表象から表象への連鎖。自らの活動を通して表象を継続的に産出して行く。

・物質的・エネルギー的な下部構造を土台にしている。環境からの寄与なしに自力で存立しているわけではない。しかし、システムの統一性と諸要素は、システム自身が産出する。意識は脳の活動に依存しているが、脳・脳波・脳細胞活動と同一ではない。脳の活動は思考内容ではない・脳は思考しない。脳は意識の環境ででる。ニューロンの活動が思考（表象）に転換される。

・構造的カップリング(strukuelle Kopplung)：システム間の依存／非依存。脳と意識とは別々に働くが互いに依存しあっている。志向性は脳に還元できない（心の哲学の問題）。

（３）コミュニケーションと観察

１．コミュニケーションの三要素：情報、伝達、理解

これらの要素はすべて、可能性の地平から選択される。三つの選択がすべて総合されてコミュニケーションは成り立つ。

コミュニケーションは人格を介して行われる。コミュニケーション・システムは自分自身を行為システムとして理解しており、そのとき、それはある人格に帰属させられている（コミュニケーションは、自らに先行するコミュニケーションをある人格の行為に縮減する、ある人格の行為として処理する。コミュニケーションを伝達行為へ縮減し個々の人格に帰属させる）。しかし、行為は社会システムの構成要素ではなく、その社会的記述である。

２．情報・伝達（メディア）・理解

情報の価値は、ほかの事態から際だっていることにあり、だからこそ、情報として選択された。伝達の選択性（どのメディアをいかに使用するかの選択）。ある発話（コミュニケーション）は続く発話においてそれが理解されたことが示されることによって完結する。

コミュニケーション（先行するコミュニケーションを理解しつつ、情報を伝達する）は次のコミュニケーションにおける理解へと接続することで、コミュニケーションとなることは、個々のコミュニケーションの成立とそれを要素とするコミュニケーションのネットの成立とがいわば循環しているということに他ならない。＝閉鎖的システム。環境に関する情報でさえも、それがコミュニケーションされることにためには、それ自体としては、社会システムに内在し、その形式はシステムに依存する。

３．観察

・理解がうまく達成されない場合（コミュニケーションの過程がよどむとき）、コミュニケーションについてのコミュニケーションが必要になる。

・観察とは、先行するコミュニケーションがどのように理解されたか、どのように理解されることを意図していたかという点から、必要な修正・説明を加えるコミュニケーション。

観察という操作は、無限の操作となり、コミュニケーションの過程における意味の生

成は、コミュニケーション過程内部では無限遡及することになり決定不可能となる（無限遡及のパラドックス）。自己観察は、「自己／非自己」の区に基づく、「自己」への指示という形をとるが、この指示自体が、先の区別に基づく「自己」を指示しなければならない。

・しかし、このような自己観察のパラドックスは、この自己自身にいては観察されない（パラドックスにかかわらず、コミュニケーションは滞りなく継続されて行く）。これがパラドックスとして観察されるのは、他者観察においてである。システムにおいて必然的で代替不可能なものが、外部観察者にとっては偶然的に現れる。

脱パラドックスの操作もまた、システム自身によって達成されねばならない。

（4）宗教とパラドックス

１．キリスト教思想におけるパラドックスの諸レベル

The Christian assertion that the New Being has appeared in Jesus as th Christ is paradoxical. It constitutes the only all-embracing paradox of Christianity. Whenever the word "paradox" and "paradoxical" are used, a semantic investigateion is necessary.

The paradoxical must be distinguished from the following: the reflective-rational, the dialectical-rational, the irrational, the absurd, and the nonsensical.

（Paul Tillich, *Systematic Theology. vol.2*, The University of Chicago Press 1957, p.90）

２．パラドックスー論理的意味論的（形式）

・テトス 1.12：彼らのうちの一人、預言者自身が次のように言いました。「クレタ人はいつもうそつき、／悪い獣、怠惰な大食漢だ。」

・自己言及、無限遡及、否定と肯定の同時

R.M.セイズブリー　『パラドックスの哲学』勁草書房。

大出　晃『パラドックスへの挑戦　ゲーデルとボーア』岩波書店。

３．神学的（内容）：三位一体論、両性論、受肉、復活、義認

キルケゴール『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』

Wenn die Subjektivität, die Innerlichkeit die Wahrheit ist, so ist die Wahrheit objektiv bestimmt das Paradox; und das, daß objektiv die Wahrheit das Paradox ist, zeigt gerade, daß die Subjektivität die Wahrheit ist, da ja die Objektivität abstößt, und das Abstoßen der Objektivität oder der Ausdruck für das Abstoßen der Objektivität die Spannung und der Kraftmesser der Innerlichkeit ist. Das Paradox ist die objektive Ungewißheit, die der Ausdruck für die Leidenschaft der Innerlichkeit ist, in der gerade die Wahrheit besteht.

（Soren Kierkegaard, Abschliesende unwissenschaftliche Nachschrift zu den Philosophischen Brocken. Erster Teil, GTBSiebenstern, S.195f.）

Der Satz, das Gott in menschlicher Gestalt dagewesen ist, geboren worden ist, gewachsen ist usw., ist wohl das Paradox sensus strictissimo, das absolute Paradox. Als das absolute Paradox aber kann es sich nicht zu einem relativen Unterschied verhälten. Das relative Paradox verhält sich zu dem relativen Unterschied zwischen mehr oder weniger schlauen Köpfen, aber das absolute Paradox, gerade weil es das absolute ist, kann sich nur zu dem absoluten Unterschied verhalten, durch den der Mensch von Gott verschieden ist; （208f.）

４．レトリック（効果）：言語の行為遂行性あるいは語用論

反常識（para+doxa）の効果、驚き・発見・震撼・転換　→　思想・思考の基礎レベルにおけるレトリックの意義

ポール・ワツラウィック『変化の言語　治療コミュニケーションの原理』

法政大学出版局。
ワツラウィックほか『変化の原理　問題の形成と解決』法政大学出版局。

（５）ルーマンとティリッヒ

１．暗号によるパラドックスの脱パラドックス化のパラドックス
２．宗教と文化：意味世界とその根拠
・意味：全体と部分（循環、要素間の関係性＜差異と類似＞、オートポイエイシス的自己参照構造）
人間経験の有意味性とその破綻（不幸）→　本質的不安定さ（無根拠・偶然性）
・宗教：意味システムの不安定さの自覚と最終的根拠の提示
パラドックスの脱パラドックス化、そのための暗号（超越の形態化）
３．宗教システムを外部から観察する。
宗教システム自体の無根拠性・パラドックス
では、神の根拠は？ → 神から神性へ、神と神性との二重化あるいは神秘主義
再度差異化する。

＜参考文献＞

１．Niklas Luhman , *Funktion der Religion*, Frankfurt a. M., 1977.（『宗教社会学　宗教の機能』新泉社。）
, *Gesellschaftsstruktur und Semantik. Bd.2*, Frankfurt a.M., 1981.
, Society, Meaning, Religion. Based on Self-Reference, in: *Sociological Analysis* 46, 1985.
, The Autopoiesis of Social System, in: Felix Geyer / Johannes van der Ziuwen (ed.), *Sociocybernetic Padadoxes*, London, 1986.
『システム理論のパラダイム転換』お茶の水書房、『自己言及性について』国文社、『宗教論』法政大学出版局、など。
２．Hans-Ulrich Dallman, *Die Systemtheorie Niklas Luhmanns und ihre theologische Rezeption*, Kohlhammer, 1994.
３．Ingolf U. Dalferth, *Evangelische Theologie als Interpretationspraxis*, Egangelische Verlagsanstalt, 2004.
II. Theologie als Interpretationspraxis　C）Kommunikation des Evangelium
４．Georg Kneer, Armin Nassehi, *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, W.Fink, 1993.
（クニール／ナセヒ　『ルーマン　社会システム理論』新泉社。）
５．小笠原真　『二十世紀の宗教社会学』世界思想社。
６．中　久郎編　『現代社会学の諸理論』世界思想社。
７．今田高俊　『自己組織化　社会理論の復活』創文社。
８．飯田剛史　『在日コリアンの宗教と祭り　民族と宗教の社会学』世界思想社。
９．厚東洋輔、今田高俊、友枝敏雄　『社会理論の新領域』東京大学出版会。
10. 高橋　徹『意味の歴史社会学　ルーマンの近代ゼマンティク論』世界思想社。
11. 村中知子編　『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣。
12. 土方　透編　『ルーマン／来るべき知』勁草書房。
13. 伊藤重行　『システム哲学序説』勁草書房。
14. ベルタランフィ　『一般システム理論』みすず書房。
15. 芦名定道　『宗教学のエッセンス』『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。